

# 福島県南相馬へ

## ボランティアにいらてきて

### 2013年9月23日～25日のレポート

2013年10月3日 郵政産業労働者ユニオン練馬支部 吉澤 利夫

福島県の南相馬市に昨年ら続いてボランティアにいらてきました。今回は昨年らも参加したメンバー4人です。他にも参加を予定していた人がいたのですが、急な用事や体調不良等で4人になりました。このボランティアに向けて練馬局に働く労働者と郵政産業ユニオン東京地本の支部代表者会議で募金を訴えました。その結果、約90名から83、761円集まり、この募金で米や水に換えて仮設住宅で生活している被災者に届けることを考えました。

今回は前日の夜に出発して朝には着いて2日半は行動できるようにしようらと考えて22日の23時に練馬駅を出発。日光街道から常磐道を走りぬけそのまま南相馬にいく予定でしたが、途中の道路が昨年と同様に原発事故によって通行禁止のために大きく迂回しなければなりませんでした。その時間は夜中の3時頃でした。警察官（群馬県警だった）から「ここからはダメです」と止められ、ここを引き返して県道36号を通過していけば南相馬にいけないと教えられその道をいくことになりました。車内では誰からともなく「あれをみると何も変っていないのが分かる。また遠回りか。予定よりも遅れて着くことになる。今度くるときには東北自動車道からきたほうがいい」の会話が交わされました。

このように原発事故によって放射線量の強い地域の道路に入ってはならない通行禁止が依然として続けられているのです。途中で仮眠休憩を1時間とってボランティアセンターについたのは7時過ぎでした。休憩時間を入れて8時間かかったことになります。道路を大きく迂回し、山越えすることがなければ6時間以内に着くことができたのですが、それにしても南相馬は遠いところにあるというのが実感です。それもその筈です。このすぐ先は宮城県です。

（今の浪江町）



ボランティア一日目の午前中は、青森県からきている20数名の団体と一緒に被災地をめぐる視察が行われました。視察に関しては別途触れますが、この日の視察では特別に浪江町に入ることができました。浪江町に入るためには検問があり、浪江町の住民か市議会議員と一緒になければ入れないのです。浪江町は朝9時から4時までの時間帯しか立ち入りができないために一時帰宅できても生活することはできません。そのためにJR浪江駅周辺の商店街はむろんのこと、2万人が住んでいたこの町の中心部は誰一人いないゴーストタウンになっていました。町中の道路は東北電力からきている信号機が不気味に赤の点滅を繰り返しているだけです。町全体は信号機が動いているだけで他は何も動いていません。地震で壊れた家はそのまま時間が止まったままです。浪江町で商売をやっていた人が原発事故で青森県に避難し、この視察に参加していました。その人が自分の家のドアを開けようとしてカギを入れたのですが、さび付いているのかカギを入れても全く動きません。裏に回って別のドアから入ろうとしてようやく入ることができました。この人は青森に避難して初めて自分の家に入ったように見受けられます。原発事故さえなければ青森に避難することなくここで商売して生活ができたのです。それができないことの悔しさと怒りが伝わってきます。

午後からの作業は、民宿と農業をやっている家の農業用ハウスの金属アーチを撤去する仕事でした。金属アーチの周辺をスコップで穴を掘り、そこから金属アーチをつかんで抜く作業ですが、なかなか抜けません。それでも何本かは抜けたのでこのまま行えばいいのかと思っていたのですが、時間がかかり疲れます。その内に半分くらいしか今日はできないだろうとあきらめかけた頃になってY君が要領をつかみました。金属アーチは埋められている金属棒に針金できつく結びつけられており、この針金をスコップで切る、あるいはペンチでゆるくしてから金属アーチを前後、左右にまわしていけば抜けるというコツをみつけたのでした。それからは時間がかかることなく作業ははかどり、夕方の4時半には約90本の金属アーチ全部を抜くことができたのでした。日頃、使っていない筋肉を使っただけの作業、肉体労働に4人ともグッタリでした。しかし、この疲れも人に喜んでもらっていることを思うと疲れを感じさせませんでした。



ボランティア二日目の午前中は、仮設住宅で生活する被災者に米を届けていく準備とペットボトルの水2リットル6本入り40ケース（翌日も43ケースを届ける）を原町にある橋本児童館

に届けることでした。放射能によって水道の水を子どもたちに飲ませられないことから支援で集まったペットボトルの水が必要なのです。市からの補助金が不十分なために支援で集まった募金によってペットボトルの水が買われ、全国からも水が送られてきます。それをこういう形で使われているのです。なお、この児童館の放射線量は0、171マイクロシーベルトでした。この日は9月25日の新聞によりますと浪江町2、505マイクロシーベルト、双葉町7、979マイクロシーベルトです。東京は0、063マイクロシーベルトですから、これよりもはるかに高い状況であることが分かります。

午後の行動は、昨年もきた相馬市柚木仮設住宅への訪問でした。仮設住宅の間取りは4、5畳の部屋が二部屋で狭いもので、ここには相馬市、南相馬市から避難している人が生活しています。二手に分かれて支援のお米と切手を届けながら話を伺ったのですが、仮設を訪ねて気がついたのは昨年よりも住んでいる人が少なくなっていることです。棟によっては半分以上使われていないところもあります。それだけ引っ越しができてきていることはいいことです。昨年よりも少なくなっているとはいえ仮設住宅で住む人同士でお互い支えあっている様子がかげえました。漁師の人が海から様々な種類の魚を獲ってきて網から取り出していた家があり、隣近所の人が手伝っていました。さっそくそこで作業していた6人にお米を渡しますと「ありがとう」と喜ばれました。訪問したときには「私たちは東京からきた郵便配達員です。この切手も使って下さい」と言って米と切手を渡しますと、「東京からきてくれたの」と言って大変喜ばれました。訪問を重ねていきますと偶然にも昨年きたときに話を聞いたMさんに遭遇し、その後のことを聞くことができました。Mさんも私たちのことを覚えていてくれて話はすぐにうちとけました。まずはこの一年間は何も変わっておらず原発事故に関して東電や政府の言っていることがくるくる変わっていることに怒りの声をあげていました。また、今の生活に疲れ果てて半ばあきらめの気持ちをのぞかせていました。



Mさんは、今一番困っていることは消費税が8パーセントになることです。そうなれば被災者の生活は大変になります。仮設住宅から引っ越して自分の家を建てるとなると消費税分は大変な負担となるので被災地では誰もが困っています。引き上げは何とか食い止めてほしい。東京の人は国会も近いので頑張してほしい。私は津波によって家が流されて仮設住宅に住んでいますが、

南相馬の人は原発事故の補償があるのに相馬の私にはありません。津波によって流された人も大変な生活を強いられているのですから補償してほしい。地震、津波から2年半以上が経って被災地のことは忘れ去られようとしていることが心配です。オリンピックが東京開催に決まったこともあって世の中の目はそちらのほうに一層いこうとしています。被災地のことは忘れないでほしい。今はこの生活に疲れてしまって、いっそのこと2年半前のあの津波にのまれて死んだほうがよかったのではないかという気にもなっています。原発事故で政府は汚染水のことではコントロールできていると言っているけどもとんでもないですよ。水道水は心配で市販されている水をこの2年半ずっと買っています。毎月8ケースは買っていますからその負担も大変です。水を買わなくてもいい生活にもどしてほしい。

Mさんには、私たちが消費税率の引き上げに反対で東京に戻ってからも反対の声をあげていくことを約束してききました。

○さんは、仮設住宅での生活に慣れてしまってここから離れられなくなっています。家族はバラバラで3つに分かれて生活しています。

○さんは、相馬の磯部に住んでいて建てたばかりの大きな家の写真をもってきて、この家が流されてしまって悔しくてたまりません。家の前の大きな石は全部流されてしまいました。東電は次から次へといろんなことを言っていますけども、どれを信じていいのかわかりません。早く原発事故を収束させてほしい。

○さんは、仮設住宅ではカビ等が出てきていますが、ここに住んでいられるだけでいいと思っていますので不満はありません。南相馬からきているのですが、私の家族はアパートに住んでいてそのアパートは流されました。アパートの持ち主には補償はありますが、アパートを借りて住んでいた人には補償はありません。だから帰りたくても帰れません。仮設住宅に今後も住み続けることができるのかどうか心配です。

○さんは、南相馬に住んでいましたが、家の周りは除染が進んでいないことに困っています。木を切るところと切らないところがあってまちまちです。孫たちがここから南相馬の小学校に通っていますが、スクールバスは朝の7時前、帰りは2本あったものが1本になりました。そのため5時間授業のときには1時間も学校でバスを待たなければならなくなりました。消費税のことで8パーセントになると家をリフォームすると負担は大変です。ガソリン代も高くなっているし、その他の物も上がっているので大変です。消費税の引き上げは本当に困ります。消費税を上げる代わりに5兆円の経済復興予算を組むといっているけども、だったらそんな消費税をあげるようなことはやめてほしいですよ。

(道路脇には船があがったままの光景を見かけます)



等の声が寄せられました。消費税が引き上げられれば被災者の生活は大変になるので何とかしてほしい、と何名もの人が言っていました。仮設住宅から早くでて生活したい人、ここを出れば住む場所がなくなるので心配している人もいました。大地震と津波、原発事故による避難生活に疲れ果て先行き不透明なことにあきらめの気持ちがある反面、仮設住宅に住む人同士が支えあって生活している元気な姿もありました。また、私たちボランティアセンターの人がお米を届けてくるのを待っているご老人がいて、「あそこは今日留守だけでも置いていってほしい」と言ってくれました。それだけ私たちの行動は仮設住宅の被災者に密着し、喜ばれていることを強く感じました。

ボランティア三日目の午前中の行動は、被災地を回ることでした。ボランティアセンターの人が最初に案内したところは津波の高さを表す場所でした。海に近いところでは津波は山を越えて20、8mの高さまで達してこの地域を飲み込んでいったといいます。頑丈にできた橋の一部は散乱していましたし、流された車も数台放置されています。次に案内してくれたのは昨年もいったところですが。私たちが気になっていたところは小高商店街、郵便局、小高小学校、JR小高駅はどのようになっているかです。この地区は原発から20km圏内で警戒区域が解除されて一年以上経って一部の店は営業していました。しかし、この地区に入れるのは夜明けの朝から夕方まで（浪江町は9時～16時）の時間帯で寝泊りできませんから一部の店といっても工事関係を扱う店等に限定されたものです。商店街のところどころで修復等の工事が行われていたものの、地区の大半は昨年と同じでゴーストタウンの状況でした。住民が寝泊りして生活できるようにならないければ復興はありません。原発事故は収束していませんし、放射能は依然として放出されているのですからいつになったら元の生活に戻れるのか全く先がみえません。

(小高郵便局とその周辺)



郵便局は今年の4月から営業を再開して局員が数名で窓口業務を行っていました。銀行や信用金庫等は震災当時のままで業務は再開していません。郵便局は民営化されているとはいえ公共性としての業務が課せられていることから他よりも早く再開しているものと思います。ここに来た

記念として、また、今晚の食事代にあてるためにボランティアに参加しているメンバーが ATM からお金を引き出していました。この小高地区では時間帯の関係からか郵便局の赤バイクは見かけませんでした。しかし、支援物資を車に積んで仮設住宅や水を児童館に届けるために走っていると赤バイクをよく見かけました。強い放射能を浴びながら配達しなければならない郵便配達員や渉外担当者に複雑な思いをもちました。「仕事で頑張ってもらいたい」ということと、「働いている以上、放射能汚染にはきちんと対応するよう当局に求めてほしい。声をあげなければ何も変わらないし、命と健康は守れない。休憩・休息時間はきちんととってもらいたい」ということを心の中で叫んでいました。

小高小学校の校庭は除染処理を行った土の置き場になっていました。それを知った小高地区のご老人たちは、この学校に子ども達は二度と帰ってくることはないだろうとショックをうけているそうです。除染処理を行った土の置き場ということは向こう何年にもわたって学校は再開されないことを意味していますから、そのショックは尋常ではありません。JR 小高駅は時間が止まっている状態でした。駅舎は古ぼけたものになり、駅の脇にある自転車置き場にある自転車の台数はそのままであり、線路は草で生い茂っていました。駅周辺のロータリーから一本の道がまっすぐに数百メートルにもわたって走っているのですが、沿道の商店街は誰一人いない状態です。南相馬市は原発事故前には8万人いましたが、今は4万6千人になっていることを後日（NHKのEテレ9月26日）知りました。この数字からも分かるように原発は事故を起こせば周辺の住民を住めない街にし、商店街を壊滅的な状態にしてしまうのです。実際、それはテレビで見ただけではなく自分の目で見ると、その怖さが身体に伝わってきます。

昨年いったこともある建設予定の浪江・小高原発はどうなったのかを聞いてみますと、今年の3月末に東北電力は建設断念を発表したといえます。福島原発事故が起こる前は原発設置を推進していた浪江町と南相馬市でした。しかし、原発事故によって今でも15万人の県民が避難生活を余儀なくされて大変な生活を強いられています。これが浪江町議会、小高市議会で建設反対の決議をあげるまでになりました。福島県議会でも県内の全ての原発を廃炉にする決議が事故直後の県議会であげられています。これが東北電力に建設を断念させるまで追い込んだといえます。また、この決議をあげるために住民の署名行動等が大きな力を発揮したといえます。やはり声をあげて粘り強い運動がどのようなところでも必要であることを教えています。

(JR 常磐線小高駅とその周辺)



ボランティア三日目のその後の行動は、昨日に続いて相馬市柚木仮設住宅の訪問でした。お米を届けながら話しを伺うのですが、この日に東京に帰ることもあって時間の関係からお米を届けることを中心に行いました。そういう中でも次のようなことを話してくれた人がいました。

○さんは、7人家族で暮らしています。家は新築で3年が経ったときに津波で全部流されました。建てた家は床暖房をつけて冬も暖かく過ごせると思っていたのに残念です。流された家の土地は市が買い取ってくれました。弁護士にも入ってもらったので流された家のローンはなくなりました。来年の1月には高台の新しいところに家をつくる予定でローンを組む予定です。中には二重ローンの人がいますが、自分はそれがなくて安心しています。

○さんは、山の高台のところに集合住宅ができるのを楽しみにしています。このごろ疲れてしょうがありません。どこに行くこともしないでここでじっとしている生活が続いています。

全ての行動を終えた後、南相馬「道の駅」で福島県産の果物、お土産をたくさん買って東京へと向かったのは13時頃でした。帰りは東北自動車道を使ったのですが、途中混んでいたこともあって自宅に一番遅くなって着いた人は22時でした。今回ボランティアに参加した人の声として「ガレキを撤去する等の仕事は地元の人が一日1万円の日当で行うようになってきている。それが生活費になっていることを考えると、今後のボランティアは福島を忘れてはならないようにしていくために現地を視察するツアーが必要ではないか。福島物を買って地元を潤すことも必要だ」「今回職場で募金を集めていったことはいいことだった。仮設住宅に住む被災者にお米を届けることも必要だし、そのためにも募金を現地に送っていくことも必要ではないか」「お米を届けることの他に被災地の人々が喜ぶような企画や要望があればそれに応えていくことが必要だ」「次回くるときには切手ではなくハガキをもっていきたい」等が出されました。

今後も被災地支援の行動が必要です。私たちが被災地に行くことで「遠いところをよくきてくれた」と感謝されますし、それは私たちにとっても励みになります。私たちは被災者が元の生活に戻れるようにしていくための支援と共に、政府に復興に向けた取組みを強化するよう求めていくこと、東電に賠償させる取組みも必要です。また、原発は事故が起これば取り返しがつかなくなることは明らかであり、原発はゼロにしていくことも必要です。なお、集めた募金のうち7万円はボランティアセンターが被災者のために米、水を買うことに活用してもらい、その中から私たちが今回被災者に届けたお米は2日間で2キロの袋、73世帯になりました。残りの1,3761円は、私たちが使用した車のガソリン代、高速道路料金代にあてたことを最後に報告しておきます。多くの方が募金に協力してくれましてありがとうございました。

